広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

ベネチア技法に「日本の美」を融合

関野 亮　大阪府／ガラス工芸家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約1年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。今回は、大阪府選出の匠、ガラス工芸家・関野亮さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

1月18日、プレゼンテーションにて

エリア・コンサルティングにて
左：下川 氏、右：関野さん

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

日本文化伝統のチラリズムの美を

関野さんが日々の制作に用いるのは吹きガラス技法だ。なかでもイタリアで400年前から続く古の技法「ベネチアンテクニック」を駆使して、これまで様々な作品を作ってきた。

関野さんの一番のこだわりは、プロポーションの美しさだ。今回のプロジェクト参加にあたっても、造形的、視覚的に美しい作品をめざし、「グラス イズ セクシー＝ふくらみとくびれのコントラスト」をコンセプトに、女性の美を象徴的に表現した。しかし、エリア・コンサルティングでサポートメンバーの下川氏から、「このグラスはヴィーナス的な女性らしい造形だが、西洋的な美しさだと思う。これに日本的な要素を加えられないか」とアドバイスを受け、日本人が作るグラスには自ずと日本の美が出ると考えていた関野さんは悩んだ。彼の作品の中には、日本の美意識を表現した紅白の酒器のシリーズもあり、「このアイデアを生かしてはどうか」という下川氏の言葉をヒントに生まれたのが今回の作品だ。グラスの形状とステムの細いラインにこだわり、レクサスのプロジェクトにふさわしいラグジュアリー感のあるフォルムを創り出した。一見すると白いステムのワイングラスだが、グラスを傾けると鮮やかな紅白の模様がステムの底に見え隠れする。「華やかな赤がチラリと見えるところに、日本文化伝統の奥ゆかしさが表現されていると思います。ワインを口に運ぼうとした時に、向かいにいる誰かをハッと驚かせ、喜ばせる楽しみもあります」と関野さんは話す。

今後はグラスの形や紅白模様のバリエーション展開も考えているという関野さん。「目の前に座る相手を楽しませるグラスというのは、新しいコンセプトなので、このスペシャルなグラスを多くの人に使ってもらい、特別な時間を楽しんでほしい」と、作品制作に意欲を燃やしている。

完成プロダクト「White and Red glass」

作品をプレゼンする関野さん

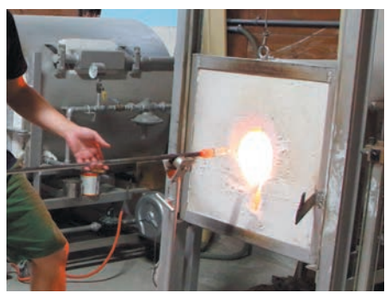
ゴブレットシリーズ

展示ブースでバイヤーと話す関野さん

自分にしかできないガラス工芸の表現を

関野さんがベネチア技法で吹きガラスを始めて約18年が経つ。最初に出会った吹きガラスの師匠がとてもおしゃれでかっこよかったのに魅せられ、おしゃれな職人になりたいと思いながら高度な技術を次々に会得し、プロポーションの美しいゴブレットを作りあげてきた。日本人の自分が作るのだから、作品にはおのずと日本の美意識が反映されると考えていたが、サポートメンバーに「西洋的な美だ」と指摘されて考え込んだ。その後にディスカッションを重ね、わかりやすくシンプルに作る、オリジナリティーを出すなど、これまで自分がやってきた方向とは違う考え方やアプローチの方法を示唆されたことが、レクサスのプロジェクトに参加した大きな成果だったという。さらに、違う分野のモノづくりの世界に生きる若い匠たちと交流できたことも貴重な経験となった。

水の都ベネチアの技法を追求してきたが、大阪もかつては「水の都」と呼ばれ、切子、トンボ玉など、ガラス工芸の盛んな歴史がある。関野さんは、そうした伝統のある土地で制作を続け、ガラス工芸を大阪の新しい産業として育むことにも意欲的だ。「今後も自分にしかできない表現を追求して作品をたくさん作り、たくさん展示会をやって、多くの人に作品と名前を知ってもらいたい。有名になって、将来はスペインに第2工房を造るのが夢。好きなガラスを吹いて、その後にワインを飲んだらかっこいいじゃないですか」と微笑む。おしゃれな職人を追求する関野さんの今後の活躍が楽しみだ。


工房にて作品づくりに打ち込む

関野 亮
大阪府／ガラス工芸家

1978年大阪府生まれ。1997年大阪デザイナー専門学校プロダクトデザイン学科卒業。2004年Keith Rowe Glass Studio制作スタッフ、2005年大阪芸術大学工芸学科ガラス工芸コース副手・技術指導員を経て、2012年に吹きガラス工房SORTE GLASS設立。全国の百貨店やギャラリー、韓国などで個展開催。NEW GLASS REVIEW 28入選（USA）、大阪工芸展 大阪府知事賞など様々な賞を受賞。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT